



# カニシム

2024.9

17  
FREE

「とりだいフェス2024」

「フォトルポルタージュ」

秋もやるよ

生命を支える究極の臓器

「心臓」を知る

鳥大の人々

森田理恵

鳥取大学医学部附属病院  
副病院長・看護部長

病院長対談「武」に「虎」

武中 篤×川口和久(野球評論家)





型コロナを含めた2類感染症を受け入れる「第二種感染症指定医療機関」だった。「すでに鳥取県で新型コロナウイルス罹患者が出ていました。私が看護部長になった頃から、病院内のスタッフに患者がぼつぼつ出始めたんです」

この頃、新型コロナウイルスの情報は限られていた。鳥取県は最後まで罹患者が出なかった都道府県の一つだった。未知の感染症に対して、住民はかなり神経質になっていた。

まずコロナ罹患者と判明した看護師たちには聞き取りを行う。患者、同僚などとの接触履歴、マスク着用の有無を確認。濃厚接触者と判定された人間も自宅待機となる。「この聞き取りにかなりの時間がとられました」

森田は当時を思い出して首を振った。「とりだいい病院では元々、看護師が不足した場合、別の部署から回すというリリーフ体制を構築していました。足りなくなつた部署に勤務経験のある看護師を他部署から回す。受け入れる側では他部署の看護師で補える仕事を調整するんです」

新型コロナウイルスの影響はこうした備えを大きく超えることになった。

「例えばコロナになった、あるいは濃厚接触者となった看護師が夜勤だった場合、他の看護師のシフトを変えなければならぬ。その日、翌日以降の勤務者、勤務時間も変更しなければならぬ」

新型コロナウイルス罹患を受け入れる感染病

るようになる」  
そのときは手術看護師をしていてよかったと思いましたがと微笑む。

「だいたい(二つの科で)一人前になるのは、3年かかるって言われています。とりだいい病院のように複数の診療科を担当する場合は、勉強は終わらないですね。病棟の看護師は、患者さんからありますがどうって言われることもあるんですが、手術部では、麻酔がかかっている患者さんと話をすることは無い。患者さんからも言われたいという事は恙なく手術が終わったということ。言われたいことがやりがいなんです」

看護師になったのは自分の強い意志ではなかった。手術看護師となり、自分が歩んできた道は正しかったのだ、これは天職ではなかったかと考えるようになった。

ごく稀に患者と会話を交わすこともある。ある日、子宮がんの知り合いの医師の手術を担当することになったのだ。

「ずっと一緒に仕事していた女性医師だったんです。すごく食べることが好きな方で、入院されたというので病室に行くと、塩鯖が食べたいなんでことをおっしゃっていた。手術終わった後に食べられたらいいね、なんて話をしていたんです。すると、お腹を開けてみると、(執刀を担当する)先生が、これはもう摘出じゃないって。思ったよりもがんが進行していた」

彼女は麻酔がかかっている。本人、家族も知らないことを自分は知っ

床の看護師を集めることにも苦心した。感染病床の担当をするならば、家に帰ってこないで、ホテルなどに泊まってほしいと言われた看護師もいたという。

「それぞれ師長たちは、自分たちの部署の患者さんを守らねばならない。その気持ちばかりです。しかし、コロナに罹患した患者さんの対応も絶対に必要。それでも行ってくれというのを日々言い続けるしかなかった」

もともと人員に余裕があるわけではない。感染病床に看護師を出す、他部署へのリリーフは、誰かにしわ寄せがいくことになる。

「師長たちからどの病棟で(スタッフに)クラスターが出たのか知りたいという声がありました。そこで週に一度、看護部でコロナ会議をオンラインで行い、情報共有しました」

クラスターとは本来「群れ」を意味する。コロナ禍では、複数感染者の発生を指すようになった。

病院内で罹患者が急増し、看護部崩壊という単語が何度か頭をよぎった。とりだいい病院は地域の基幹病院であり、医療の最後の砦である。絶対に崩壊させてはならない。

「そこで何か困ったことないですかという感じで、各部署の問題点を師長から拾って解決策を考えるとということをしていました」

「彼女は当時50歳ぐらいだったのかな。糖尿の気があって、子宮にがんがあると分かってから、なかなか手術できなかった。ようやく手術にこぎつけてみたら、手遅れだった。すごく頑張って仕事していた彼女がなぜこんな目に遭わなければならないんだらうって」

後日、彼女の病室に行った。「痛いところないですか、早くご飯食べられるようになればいいですね、など当たり障りのない話だけしかできなかった。彼女も医師なので自分の状態を分かっていたのでしよう、あまり元気がなかった」

彼女が亡くなったのはそれからしばらくしてからのことだった。自分たちが患者と関われるのはほんの一瞬に過ぎない。だからこそ全力でやらねばならないと強く思った。

とりだいい病院の看護部長である森田が現在、最も注力しているのは後進の育成である。

### 働き方改革で看護師は「鍵」となる存在

「医療現場でDX(デジタルトランスフォーメーション)、AI(人工知能)の導入が進むの間間違いありません。ただ、人のできないことがあります。医師は常にたくさん

### 手術看護師、という職の重み

森田は1967年に米子市で生まれた。元々は保育士になりたいと臆気に考えていたという。通っていた高校には看護師を目指す同級生が多かった。そこで国立米子病院(現・米子医療センター)附属看護学校に進むことにした。看護師だった母親は喜びながらも「大変だよ」と言った。そのとき、小さい頃、母親は夜勤で家にいなかったことを思い出したのだ。

卒業後、神奈川県リハビリテーション病院、松江医療センターを経て、96年に鳥取大学医学部附属病院の手術部に入職した。「神奈川県リハビリテーション病院ではICU(集中治療室)とオペ(手術)室が一緒になっていたんです。だから手術部でもある程度、できるつもりだったんですが、とりだいい病院では全診療科の外科手術に対応しなければならぬ。もうプラドは全部捨てて、底辺から始めました」

手術看護師の役割の一つは、「器械出し」である。執刀する医師の側に立ち、器具を渡す――。

「手術の流れを読んで、次はこの器具が必要だろうって先回りするんです。テンポあるいは学会などで外に出かけることも多い。患者さんにとっていい医療はなんだろうって考えると、常にそばについている看護師の役割が大きくなるんです。患者さんの病状に急変があったとき、的確な判断ができることなど、患者さんを守る看護師を育てなければならぬ」

今年4月から医療従事者の時間外労働に上限が定められた。医療の「働き方改革」が始まっている。

医療の働き方改革において、看護師は鍵となる。これまで医師の専任事項とされていた分野、例えば麻酔に関しては周麻酔看護師という専門知識のある看護師が担うこともできる。一方、事務作業などを看護師以外に割り振るというタスクシフトが必須だ。

「私たちの時代と比べて、今の看護師は夜勤を避ける傾向があります。特にお子さんがいると保育園の送り迎え、そして当然のことですがお子さんとなるべく一緒にいたいという気持ちは理解できます。子育ては応援しなければなりません。同時に看護師とは24時間患者さんに付き添わなければならない仕事でもある。そこで夜勤は必須になる。それを自身の看護師にだけ押しつけていいのか。夜勤をしてくれる看護師をどう守るのか」

今、彼女はその解を探し求めている。森田自身、独身時代から率先して夜勤をしていた。



よく渡すと、手術は早く終わる。そうならば患者さんの身体への負担が少ない」

手術前日、手順を理解するために解剖学などの書籍に目を通す。また、診療科によって使用器具は違うのはもちろんだが、渡し方も変える。

「手術を行う医師は、切開した部位から目をそらさない。基本は器具を渡しましたと伝えるためにバシッと渡します。ただ、脳神経外科の手術ではデリケートな器具が多いので、そっと渡さなければならぬ。慣れてくると流れの中で器具が出せ

し、夜勤が負担でもなかったもので、どうぞぞって引き受けてました。結婚したあとも、子育てはうちの母と父、そして夫に頼んでました。振り向いたら大きくなっていたという感じでした」

ただ、朝出かけるるとき、子どもが「じゃあまた明日ね」と言ったときはハッとしましたね、と笑う。

「確かに私は朝早くから出かけて、帰ったときは子どもたちは寝ているなって」

最近その娘が小学6年生になり、将来は看護師になりたいと口にするようになった。自分の仕事を認めてくれていたのだと嬉しくなりましたね、と顔をほころばせた。「看護師をしていると、他の病院の知り合いができたらし、世界が広がる」

看護という仕事はやり甲斐があると思うんですよと付け加えた。

文・田崎健太

1968年3月13日京都市生まれ。ノンフィクション作家「カニジル」編集長。早稲田大学法学部卒業後、小学館に入社。「週刊ポスト」編集部などを経て独立。著書に「偶然完全勝新太郎伝」(球童 伊良部秀輝伝)「ミス・ポッターライク賞優秀賞」(電通とFIFA)「真説長州」(真説 佐山サトル)「スポーツアイデンティティ」など。最新刊は「横浜フリーユゲルスはなぜ消滅しなければならなかったのか」(カンゼン)。小学校3年生から3年間鳥取市に在住。株「カニジル代表」として、とりだいい病院1階で「カニジルブックストア」を運営中。

森田理恵(もりた りえ)

鳥取県米子市出身。1989年国立米子病院(現米子医療センター)附属看護学校卒業。神奈川県リハビリテーション病院、松江医療センターで勤務を経て、1996年鳥取大学医学部附属病院に入職。手術部へ配属。2003年放送大学教養学部卒業。2007年鳥取大学大学院医学系研究科保険学専攻修士課程修了。2008年日本看護協会が認定する手術看護認定看護師資格取得。2013年に看護部長。2018年に副看護部長。2022年4月より鳥取大学医学部附属病院副院長・看護部長となる。



# 心臓を知る

「心房細動」「心不全」「カテーテル手術」「人工弁」

「神の宿る心臓だけは傷つけてはならない」、古代ギリシャの哲学者アリストテレスの言葉である。臓器の中でも生命維持にとって一番大切な「心臓」の手術は最も難易度が高く、医療の歴史において長いあいだ未踏の領域とされていた。心臓の動きを止めてしまうと生きていけないからだ。人工心肺をはじめとする医療機器の発達によって安全に心臓手術が行えるようになったのは、20世紀後半になってからのことである。日々進化を続ける「心臓」に関する最前線取材した。

取材・文 西村隆平 取材協力 井野寿音  
写真 中村治

## 「心房細動」と「心不全」は コインの両面のようなもの

心臓の動きを一言で表現するならば、体の中で血液を循環させる「ポンプ」だ。肺から取り込んだ酸素を血液の循環で体のすみずみまで運び、同時に体の中で作られた二酸化炭素を体外に排出する。この心臓の周期的な収縮運動がおかしくなる状態のことを「不整脈」と呼ぶ。「不整脈にはさまざまな種類があります。なかでも発症する頻度が多く、他の病気の原因にもなるため特に注意が必要

なものに「心房細動」という疾患があります。これは心房という部屋の筋肉の一部がブルブルと震えて、痙攣を起こしているような状態になるのです」

そう語るのは、とくだい病院循環器・内分泌代謝内科学分野講師の衣笠良治だ。循環器内科医は心臓や血管を中心に、血液の流れに関する疾患を専門的に扱う。

心臓は、右心房、右心室、左心房、左心室と呼ばれる4つの部屋が、それぞれに適切なタイミングで「拡張」と「収縮」を繰り返している。

「痙攣を起こすと心房の中の血液を充分に送り出せなくなるので、流れが淀んで血栓と呼ばれる血の塊ができることがあります。その血栓が血流に乗って頭の方に流れてしまうと、脳の血管が詰まる脳梗塞の原因になることがあるんです。また、心臓の動きを悪くする「心不全」の原因にもなります」

放置すると怖い病気なんですと衣笠は強調する。心房細動と心不全はコインの両面のようなものだ。心不全は、「心臓の動きが悪く、それが原因で息切れやむくみといった症状がでること」と定義されている。

心房細動が原因で心不全になってしまった場合もあれば、逆に、心不全になったことで心臓に負担がかかり心房細動が起こることもある。また心房細動を起こすことで心不全を悪化させ、そうなると余計に心房細動が治りにくい、まさに悪循環

環に陥ってしまう。

「いくら薬で心房細動を抑えても、長い目で見ると結局、患者さんの寿命はあまり変わらない。でも最近では、カテーテル手術で新しい治療ができるようになってきた。心房細動の原因となる異常な電気信号が起こっている部分を、冷却したり焼灼したりすることで、その乱れを整えることができるんです。これによって、薬での治療が難しかった患者さんも治療ができるようになってきました」

カテーテル手術というのは、足の付根にある大腿動脈という血管からカテーテルと呼ばれる細い管を入れて心臓まで通し、血管内から治療を行う手術のことだ。従来の外科的な手術よりも体への負担が少ないので、術後の回復が早く合併症のリスクも低いという特徴がある。

## カテーテル手術が 全ての人のために 最善であるとは限らない

心臓を扱うのは循環器内科ともう一つ、心臓血管外科である。

心臓血管外科医として、「心臓弁膜症」の患者を扱ってきたのが、とくだい病院心臓血管外科教授の吉川泰司だ。高齢化に伴い患者数が増えていると吉川は指摘する。「心臓弁膜症は加齢による影響が避けられない。例えば心臓の弁が分厚くなる肥厚とか、石灰が付着して硬くなるのを

遅らせるということは、今の医学ではまだ難しいんです」

左心室の入口に「僧帽弁」、出口に「大動脈弁」、右心室の入口に「三尖弁」、出口に「肺動脈弁」という血液の逆流を抑える「弁」がついている。心臓弁膜症とは、加齢や感染症などの問題によって、これらの「弁」が正常に機能しなくなる状態の総称である。

治療方法の一つは「弁」の置き換え——弁置換術である。

人工心臓という装置を用いて心臓と肺の動きを代行、一時的に患者の心臓を停止させた状態で切開して手術を行う。これが「開心術」という術式だ。心臓を停止させるため、安全な手術時間は4時間まで。術者は、迅速かつ正確な技術が求められる。

近年、開心術以外にも「TAVI(Transcatheter Aortic Valve Implantation)」と呼ばれるカテーテルを使った手術が可能になった。カテーテルは、患者の身体への負担が少ない「低侵襲」手術である。ただし、と吉川は留保をつける。

「日本ではTAVIが保険で受けられるようになってから、まだ11年。海外でも保険診療になったのは2000年代後半なので、まだカテーテル手術で使う人工弁自体が長持ちするかどうか誰にもわからない。例えば70歳の人にカテーテルを入れると、10年後に80歳で弁がダメになるかもしれない。でも、そこでもう1回カ





テーテルを入れるとなると、場合によってはできないこともある」

開心術では、確実に機能が15年持つことが実証されている人工弁を使用する。今の日本のガイドラインでは、基本的に80歳以上の人はカテーテルの弁、75歳から80歳はどちらを入れるか議論する。75歳未満の後期高齢者になる前の人は開心術を行い普通の人工弁を入れるほうが良いとされている。

この人工弁には2種類ある。一つは牛や豚などの組織を使って作られた「生体弁」。もう一つは、特殊なカーボン素材で作られた「機械弁」だ。機械弁は耐久性に優れており、半永久的に使用することができ、ただし、血液が接触すると血栓ができやすという特徴があり、血が固まるのを防ぐ抗凝固剤（ワーファリン）を、一生を通じて服用し続けなければならない。



を全員に勧めることはできません。高齢化した非常に手術リスクの高い人たちに對して、画一的な治療ではなく、一人ひとりに最適な治療が何かを個別に考えて「テーラーメイド医療」をすることが求められるのです」

### 医療技術は進化を続ける、それでも予防がいちばん肝心

前出の心不全という言葉はしばしば耳にする言葉である。この心不全の捉え方が変わってきたと衣笠は言う。「循環器の世界では、高血圧とか糖尿病といった時期から、もう心不全の予備軍であるという考え方が1次予防であるという考え方になってきています。病気になるようにするのが1次予防ということになり、病気になる前からそれ以上悪くならないようにするのが2次予防。高血圧、糖尿病は1次予防の

「抗凝固剤を服用すると出血しやすい状態になります。脳出血や消化管出血というような入院を要する出血に対して年1%のリスクがあると言われています。100人中1人というのを、多いとするか少ないとするか。若い人は薬の管理もできるし、組織もしっかりしているからいいかもしれない。でも高齢者には転倒や薬の飲み忘れという心配もあるので、機械弁

最近注目されているのが、「Apple Watch」のアプリでの不整脈検出だ。普段身につけるガジェット（デジタル端末）を使用して長期的に脈拍を計測するため、ごくまれに出る不整脈でも検出が可能だ。他にも服の下に付けて24時間計測できる機器、自分で取り外しのできる携帯型の心電図計、皮膚の下に埋め込んで年単位で計測できる機器なども開発された。ただし、である。

「もちろん胸のレントゲンやCTを見て分かる場合もありますけど、どうしても見逃すということがあります。一方、弁膜症の患者さんに聴診器をあけると心臓の雑音が聞こえます。心雑音は一般の人が聴いても明らかですから、医者が聴診したら一発でわかるわけです。今は聴診に頼らなくても診断ができますけど、

昔の医者は聴診器一本でいろんなことを診断していました。やっぱりそこに立ち返るということも大事なんです」

吉川はとりだい病院の心臓外科教授に就任した際、周辺の開業医50施設を回って挨拶、同時に「聴診器を使ってください」と啓発していったという。その受け皿としてとりだい病院に「心雑音外来」を作って、クリニックの先生が大学病院を紹介しやすい環境も整えた。敷居を下げて来院を促すことによって、すでに何人も患者さんが聴診器をきっかけにして弁膜症の発見から手術にまでつながるという成果が出てきている。

「あまり目新しいことではないかもしれませんが、食生活の改善や適度な運動習慣などといった、ほかの病気を防ぐための知識を活かし実践することが心臓の病気にとっても有効な予防法です」（衣笠）生活習慣の改善が、心臓を守るための最善の方法にもなるのだ。



2024年6月16日。とりだい病院外来棟1階を中心とした一帯で「とりだいフェス2024」が初開催された。病院をみんなの遊び場にしようというかけ声で、とりだい病院の医療を知ってもらおうことを柱とし、キッズディスコ、足湯、音楽、キッチンカーとエンタメ盛りだくさんで行われた。この前代未聞のイベントに約4000人もの人々が詰めかけた（遠くは東京から!!）。笑顔と熱気に包まれた「とりだいフェス2024」を写真とともに振り返る。

写真 中村 治 取材・文 中原 由依子





とりだいフェスのメインステージが置かれたロビーは、普段は患者さんが受付や会計を待つ場所である。子どもたちの医師体験「とりザニア」は、総合診療外来の待合とその奥に続く外来ラウンジ。癒しのハンド&リンパマッサージは、玄関前に設置する足湯と近い場所にするため、外来入口の風除室や付近の相談室に配置。工学部辻田(勝吉)研究室は、医療福祉支援センターで体験型のブースを展開することになった。

会場の準備は前々日の金曜日の夕方からスタート。椅子や机を撤去しフェスで使う機器やパネル、立て看板が運び込まれた。

この前代未聞のイベントが動き始めたのは2024年1月のことだった。

様々な部署から有志が集まった「実行委員会」で、会議を重ねていった。とりだい病院をより身近に感じて欲しい——委員の思いから、次々と企画案が出てきた。

ただし、とりだい病院はあくまでも医療機関。フェス当日は日曜日で休診日であるが、救急の患者さんや面会者が病院にやってくる。その方たちの邪魔にはならない。さまざまな思いで入院生活を送られている患者さんにも配慮が必要だ。こうした懸案事項が出てくるたびに、侃々諤々の議論が行われた。

実行委員長の藤原和典教授は、一番心配していたのは「天気」だったと振り返る。

「6月はまさに梅雨時期、フェスの目玉、漫才師タイノジさんの『キッズデイスコ』の会場は、屋根のない中庭です。雨天であれば室内でというプランも用意していましたが、降らないでくれと毎日天気予報とにらめっこしてました」

前例のないイベントであるため、どれくらい人が集まるのか、という予測も立てづらい。病院が主催の市民公開講座などは多くても参加者は数百人。そこで当初は1000人を想定した。しかし「周辺で行われているイベントに、結構来場者がきている」と実行委員の一人、杉原誉明教授から連絡があり、急遽、想定人数を3000人として内容を見直すことになった。3機種の手術ロボットマシンが見学できるツアーも「2パターン」用意。飲食スペースも増やし、警備・清掃体制も厚くしたのだ。

迎えた当日。天気はぎりぎり梅雨入り前で朝から晴天に恵まれた。

朝7時から音響関係、入口ゲート、テント設営が始まる。8時を過ぎるとキッチンカーや足湯用のタンクローリーも到着。ステージパフォーマンスを披露する音楽芸人こまつさん、漫才



若槻祐太さん  
看護師（手術部）

👉 番長CHECK!!

テーマはカメラ。「休日はもちろん、通勤時もカメラを持ち歩いています」という若槻さん。カメラをアクセサリ感覚でコーディネートに取り入れているところがお洒落上級者です。

「シンプルなスタイルなのに、お洒落感あふれている！」（イノー）  
「デニムのステッチとTシャツのカラーを合わせている感じが良いですね！」（サワ・ツバキ）

FASHION CHECK

あの大人気企画が帰ってきた！

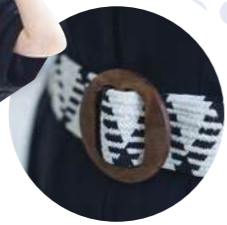
とりだい病院★  
ファッション  
チェック！  
リターンズ

カニジル10号で大好評だった企画「ファッションチェック」が皆様のラブコールにお応えし、パワーアップして帰ってきました！

あれから2年半、還暦を迎えたという噂のファッションista「ドン・クロサキ」を筆頭に、今回もスタッフの普段着を覗き見しちゃいます！

熱いスタッフたちの爽やかな「夏」コーデをご覧ください！

写真・中村 治



別名  
「クロサキズ・エンジェル」だ!!

ドン・クロサキ本日のファッションチェック

医局の皆さんから、還暦のお祝いにももらったネクタイに合わせて、ピンクのストライプシャツを組み合わせたコーディネート。

イノー本日のファッションチェック

シンプルな黒のワンピースに、ポイントで幾何学模様のベルトをチョイス！

新メンバー サワ・ツバキのファッションチェック

オフホワイトで統一したスタイルに、差し色で夏らしいブルーのシースルートップスの組合せ。

矢間敬章さん 医師（耳鼻咽喉科）

矢間友美さん 看護師（がんセンター）

👉 番長CHECK!!

パパ・ママファッション。普段から無難で楽なスタイルを選んでいると話す矢間夫婦。「ついでにこのあと、このコーディネートで子どもの参観日に行ってきます」と笑顔も素敵なお夫婦です！矢間先生が身につけている時計は、専門医の合格祝いに奥様の友美さんがプレゼントしたものの。

「素敵！こちらがにやけてしまうぐらいお似合いです」（イノー）

「楽に着れてお洒落なサロベツ。大人っぽく綺麗に着こなしていますね！合格祝いにプレゼントされたエピソードも素敵です！」（サワ・ツバキ）



とりだい病院 代表素敵夫婦



師ダイノジさん、医学生音楽サークルのメンバーもそろった。「無事にかつケガがないように気をつけて。我々もフェスを楽しんでいこう！」

藤原教授の合図とともに、ボランティアを含めたスタッフがそれぞれの担当場所に向かったのだった。

開場とともに多くの人が詰めかけ、対応が追いつかないブースもあった。それでも、とりだい病院の本物の医療にふれてほしいという思いと、楽しいことをして地域を盛り上げたいという思いは伝わったのではないかと藤原教授は目を細める。

この日に限っては、とりだい病院はスタッフ、出演者、そして来場者を笑顔にし、楽しく酔いしれる「遊び場」になっていた。実行委員のメンバーも「夢みたいない日だった。地域の人があんなにたくさん足を運んでくれてとても嬉しかった」（森輝美師長）「子どもたちの笑顔が輝いていた。きつと体験したことが子どもたちの記憶にも残るはず」（植木賢教授）と興奮が冷めやらない。

ここまでやっちゃとりだい病院、自慢したくなる病院（Our hospital）に一歩近づけたのではないだろうか。秋にもフェス第2弾を開催予定。乞うご期待!!



福井惇也さん  
山根 真由佳さん  
平井咲希さん

☛ 番長CHECK!!

3人とも、清潔感のある白でまとめたこのコーディネート。「普段は、院内・院外含めていろんな人と接する機会が多いため、常に清潔感のあるスタイルを意識しているそうです。

「笑顔が素敵すぎる！」(イノー)  
「今年トレンドの“パラシュートパンツ”を組み合わせたコーディネートが良いですね」(サワ・ツバキ)  
「あ！このパンツ、うちの娘がはいてる！」(クロサキ)

仲田夢人さん  
臨床検査技師 (検査部)

☛ 番長CHECK!!

「シンプルできれいめなスタイルを意識しました」という仲田さん。ちょっと奮発したTシャツとポイントのネックレスは同じブランドで統一。

「お洒落上級者！」(ドン・クロサキ)  
「モノトーンコーデがシンプルなのに洒落」(イノー)  
「ミニバッグを活かしたコーディネートがさすがです」(サワ・ツバキ)



クロサキ「インジエルの声が揃って「かわいー」って響き出すと、

響き出すと、



宮田 麗さん  
看護師長 (看護部室)

☛ 番長CHECK!!

娘さんから借りてきた猫のプリントTシャツがお気に入り。「普段から楽ちんで動きやすい、そして着ていてストレスがないものを選んでいきます」と話す宮田さん。今年トレンドのショート丈のTシャツをさらっと着こなしています。

「脱みつけている猫ちゃんが可愛い」(イノー)  
「娘さんと洋服が共有できるのは、理想です」(サワ・ツバキ)



森田歩未さん  
看護師 (整形外科)

☛ 番長CHECK!!

「白と黒以外の物は買わない」という森田さん。黒のサンダルとネイルを合わせたモノトーンコーディネートは、ファッションのトレンド関係なく通年で人気のあるスタイル。

「可愛い！！」(ドン・クロサキ、イノー、サワ・ツバキ)  
「いつものピンクのスクラブ姿も素敵ですが、私服も素敵です」(イノー)  
「コーディネートに合わせたニュアンスネイルもさすがです」(ドン・クロサキ)



女性陣、学生から大好評！

湊 弘之さん  
医師 (麻酔科)

☛ 番長CHECK!!

「普段からシンプルにTシャツとパンツのスタイルが多いです」と話す湊先生。ポイントはスケルトンの時計。

「シンプルなTシャツ、グルカパンツにエヌパドリューを組み合わせたコーディネートはスタイルのいい湊先生だからこそ似合うスタイルですね」(サワ・ツバキ)  
「スケルトンの時計もお洒落」(イノー)



ヘアスタイルも素敵。



中井梨華さん  
看護師 (病棟7階A)

☛ 番長CHECK!!

歌い手としても活動中の中井さん、この日のテーマは猫。ポイントは、猫のピアスという中井さん。前から見るとシンプルだけど、後ろから見ると、デザイン性が強調されるパンツがヘアスタイルにもピッタリ。

「ロックテイストのコーディネートに、可愛らしい猫のピアスのギャップが良い！」(イノー)  
「足首からチラ見えるアンクレットもお洒落」(ドン・クロサキ)



吉田賢史さん  
医師 (放射線治療科)

☛ 番長CHECK!!

ブーツカットのパンツ、ナバホ族の貝で作ったネックレスがポイント。お洒落のポイントは、洋服を一つひとつ大事に着る事と話す吉田先生。

「想い入れがあるネックレスが素敵」(イノー)  
「ブーツカットのパンツが懐かしい」(ドン・クロサキ)



今回唯一の「一回一回」の脚跡。

森 輝美さん  
看護師長 (病棟4階BD)

☛ 番長CHECK!!

テーマはオレンジジュース。夏らしいワンピースを主役にコーディネートしたという森さん。コーディネートからも森さんの元気が伝わります！

「紫陽花のネイルが素敵です」(イノー)  
「元気な夏らしいビタミンカラーが森看護師長のイメージにピッタリ」(サワ・ツバキ)



上灘紳子さん  
看護師長 (感染制御部)

☛ 番長CHECK!!

「シンプルなものが好き」という上灘さん。一見シンプルに見えますが、後ろにパールのボタンをあしらったブラウスを合わせたコーディネートは、大人の余裕を感じます。

「キャリアウーマン感が、コーディネートからも現れていますね！」(サワ・ツバキ)  
「シンプルスタイルですが、こなれ感が◎」(ドン・クロサキ)



吉田雄一さん  
医師 (皮膚科)

☛ 番長CHECK!!

「夏の青空」を意識したという吉田先生。夏の学会に参加するイメージでスーツのコーディネート。ブルーで統一されたコーディネートは、「夏の青空」そのもの。スーツはオーダーメイド。

「このコーディネート、奥様がチョイスされたそうです。さすが！」(ドン・クロサキ)  
「テーマの夏にピッタリ。爽やかなコーディネートですね」(サワ・ツバキ)



病院長が話題の人物に迫る！

# 武に虎



川口和久

武中篤

元野球少年でもある武中 篤病院長が、どうしてもお会いしたいと対談のお相手に選んだのは、元プロ野球選手で現在、故郷である鳥取市にお住まいの川口和久さんです。野球の解説者や指導者として、またタレントとしても活躍する多忙な日々の傍ら、本格的なお米作りにも取り組んでおられます。“野球”と“医療”という、まったく違う道を行ってきたお二人ですが、大好きな野球のこと、鳥取の自然や食のこと、そして人々の生活を支える病院のことを熱く語り合ってきました。

写真 中村 治 構成 カニジル編集部

## 「石投げ」で肘の使い方を習得した少年時代



**武中** いきなり申し訳ないんですが、ぼくは江夏（豊）さん、田淵（幸一）さんの時代から（阪神）タイガースファンでした。川口さんがいた広島（カープ）は兄弟球団という感じというか……。

**川口**（首を振って）もうこのファンでもいいんです。とにかくプロ野球を応援して盛り上げていただければありがたい。

**武中** 川口さんは鳥取市の生まれ。ご実家は吉岡温泉の旅館だったとか。

**川口** 温泉街のど真ん中にある旅館でした。朝早くから深夜までお袋たちがお客さんの応対をしていました。夜まで電気がついていたので、近所の仲間が集まってきて、ずっと外で遊んでいました。昼間は（収穫が終わった）田んぼで野球をして、川や海で泳いだり、文字通りの野生児でしたね。**武中** ぼくは兵庫県の加東市出身ですが、同じような生活でした。ただ、うちは内陸部なので海はなかった。

**川口** 秋は山でアケビや栗をとったり、冬はスキー。湖山池が近いのでテナガエビを釣ったり。夏は（日本海側の）白鬼海岸まで自転車です、40分走って泳ぎに行っていました。

**武中** 最高の少年時代ですね。**川口** 海岸で石を投げて、何段ハネるか競い合っていました。（立ち上がったって左腕を横

から振って）こうやってサイドから石を投げるじゃないですか。この肘の使い方で、ピッチャーゴロをとって、ファーストにふわっと投げるときと同じなんです。

**武中** 遊びながら肘の使い方を習得していた（笑）。子どもの頃からプロ野球選手になるつもりでしたか？

**川口** ぼくは3人兄弟の末っ子なんですけれど、上の2人が無茶苦茶野球が上手だったんです。兄を見ながら野球をしていただけでした。ぼくは投げるのは左なんです、右打ち。（右打ちの）兄の真似をしていたら、右打ちになってしまった（笑）。**武中** 左投げは川口さんだけ？

**川口** ぼくだけです。旅館やっていることもあって箸を左で持つなど親からきつく言われて、日常生活では一生懸命矯正しました。ぼくは右手で鉛筆持ちながら、左手に消しゴム。ハサミも両手で使えます。

**武中** 外科医の世界では、左利きの人は両手を使えるから手術が上手いって説があります。利き手ではない方を使わなければならぬので器用になるのかもしれない。

## プロに入ってくる選手はみんな才能がある。人との出会いで「差」が出る

**武中** 川口さんは中学校卒業後に地元鳥取城北高校に進みました。他県からも誘いがあったのではないですか？

**川口** ありました。でも一番熱心に誘ってくれたのが鳥取城北でした。

**武中** どの高校に行くかというのは、一つの大きな選択ですね。

**川口** ぼくの場合は鳥取城北が合っていたと思います。というのも、ほとんど教えられなかったんです。当時の鳥取は（読売）ジャイアンツ戦しか中継がなかった。（同じ左投げの）新浦（壽夫）さんの脚の上げ方とか真似していたら、球が速くなった。

**武中** 真似ることで自分のスタイルを確立した。高校生のときにはすでに全国に名前を知られるようになり3年生のときにロッテ（オリオンズ）現千葉ロッテマリーンズ）からドラフト指名を受けました。

**川口**（監督だった）金田（正一）さんから電話がかかってきて、「俺の背番号34と契約金3500万円約束するから来い」って。ロッテに行くことすごく走らされるという印象があった。高校から入るよりも社会人で即戦力としてプロ入りした方がいいという考えもあったので断りました。

**武中** そこで鳥取城北から大阪にあった社会人野球のデュープロに進まれた。そこでは野球中心の生活だったんですか？

**川口** 仕事8割、練習2割でした。朝から夕方5時まで営業マンとして普通に仕事していました。仕事が終わったら（大阪の）中之島公園を走って、会社の屋上にあったブルペンでピッチングして帰る。専用のグラウンドもなかったので全体練習場所も日替わりでした。

**武中** そんな生活をしながら良くモチベーションが保てましたね。

**川口** いや、保てなかった（苦笑）。あの当時、高卒でドラフトを拒否すると3年間はプロ入りできなかった。デュープロの2年目、仕事ばかりで練習できない。旅館を手伝いながらアマチュアで野球を続けようかと一度、鳥取に戻っているんです。そうしたら知り合いが、広島（カープ）に先輩がいるからって電話してくれた。次の日、（監督の）古葉（竹識）さんから電話があって、左ピッチャーが欲しいから獲るっていうんです。

**武中** その方がいなければプロは諦めていたかもしれない。そして、ドラフト1位で広島から指名。広島は練習が厳しいというのは本当ですか？

**川口** その通りです。走るのが嫌でロッテを断ったのに、広島ではその数倍走らされました（苦笑）。

**武中** そこで鍛えられたことでプロでやっていく素地ができました。医師でも同じですが、若いときに誰とどこで出会うかで人生が変わるとぼくは考えています。

**川口** 同感です。プロに入ってくる選手はみんなそれなりに才能があるんです。差が出るのは人との出会いかもしれません。その意味でぼくは恵まれていたと思いますね。

**武中** 広島では先輩と同じ山陰出身の左腕、大野豊さんがいました。**川口** ええ。大野さんには本当にお世話

になりました。師匠みたいな方です。当時、大野さんは先発からリリーフに回っていたんです。プロ入り2年目の7月15日の(対大洋ホエールズ戦)で初勝利を挙げたとき、ぼくが6回まで投げて大野さんが3回を抑えてくださった。

**武中** クローザーは1イニング限定という意識がなかった時代ですね。あの当時の広島には、大野さんの他、北別府(学)さんという大エースもいましたね。

**川口** 北別府さんは針の穴を通すコントロール、大野さんは七色の変化球。そこでぼくは、ノーコンの川口で通したんです(笑)。

**武中** 確かに川口さんはコントロールよりも球の切れで勝負という印象がありました(笑)。でも、ノーコンってプロの投手としてあまり嬉しくないですよ。

**川口** いいんです。人間って生き方だと思うんです。北別府さん、大野さんと違う自分の特色を出せばいい。

**武中** 当時、川口さんはまだ20代、大人びていましたね。

**川口** 会社員生活を経験したことがぼくの強みになったのかもしれないね。プロの先発投手は月に5試合程度、登板。5試合のうち2勝すれば、6ヶ月で12勝。先発投手としてのノルマは達成。月の初めにポイントと2勝すれば、3試合目は勝てば儲けもの、来月の貯金のつもりで投げられる。**武中** そのときにこそ、いい投球ができましたよね(笑)。

トノーラン記念、杉内君おめでとう」っていうボールを10ダースプレゼントしました(笑)。

**武中** ぼくも同じ考えです。プライベートの場で人間の性格が分かることがあります。

**川口** それもぼくがセールスマンをやっていたからかもしれません。取引相手が何を考えているのか、どんな人なのか、釣りやゴルフで探るじゃないですか。

**武中** 社会人生活という当時は、無駄だと思っていた時間が実はそうではなかった(笑)。ところで、川口さんは2021年の年末から故郷の鳥取市に戻られましたね。

**川口** コロナ禍で野球教室などの仕事がすべてなくなりました。そこで女房と2人で鳥取に戻ってみたら、この地の良さに気がついた。水は美味しいし、空気は綺麗。海も山もあって、食材に恵まれている。ぼくは18歳までしか鳥取にいなかったのですが、本当の良さを知らなかったんです。

**武中** 高校までは野球漬けでしたものね(笑)。

**川口** そんな余裕ないです。たまに家にあるカニを食ったりするぐらい。そのときは身近にあるものだから、ありがたみはなかった。改めて食べてみると、これが旨い(笑)。鳥取を気に入ったのはぼくよりも女房だったんです。東京出身の彼女が鳥取はすごくいい、ここに住もうと言いついた。今は、鳥取(コナン)空港の近くに住んでいて、(野球)解説の仕事があるとき

**川口** これってセールスマンと同じなんです。ノルマ達成して、肩の力が抜けると余計売れる(笑)。

### 鳥取県から「強打者」がでなかった理由



**武中** 川口さんに一つ聞きたいことがあるんです。鳥取県は川口さんをはじめ、元阪急ブレーブスの)米田哲也さん、(ジャイアンツの)角三男さん、小林繁さんなどいいピッチャーを輩出しています。なぜピッチャーだけなんでしょう?

**川口** (腕を組みながら) ぼくは2つ原因があると考えています。一つは打者に関しては、初球を振らないように指導されていた

だけ東京に行っています。

**武中** 理想的な2拠点生活ですね。今は米作りもやられている。

**川口** コロナ禍の最中にお袋が亡くなったんです。納骨のときにたまたま空いている田んぼがあるという話になりました。女房がそこで米を作ろうと言いついた。

**武中** やはりきっかけは奥様だったんですね(笑)。米を作るって大変じゃないですか?

**川口** いや、葉っぱ植えるだけだから(笑)。もちろん草取りとかもあります。それは大変だと思わない。今年で2年目なんです。最初に収穫できたときは本当に嬉しかった。コーチのとき一生懸命教えても伸びない選手もいる。でも、米は嘘をつ

こと。ピッチャーのレベルが低いので待つていれば四球で塁に出られるかもしれない。だから初球がストライクでも振らない。

**武中** 消極的ですね……。

**川口** 慎重な県民性が出ていると思うんです。野球というのはタイミングのスポーツ。バットを振って見ないとどれくらい遅れているのか分からない。一打席目の初球を見送ることは、チャンスを一つ失うことになる。

**武中** 投手の球速に馴れる機会を失うことになる。

**川口** プロの世界では初球を見逃す選手は、甘い球が来れば仕留める自信がある。そうではないのに見逃す必要はない。そしてもう一つは、ボールを上から叩きなさい

かない。手を掛ければ結果が出る(笑)。

ここには山から来る美味しい水がある。それを使えば美味しい米ができることは分かっています。刈り取った米を天日干しにしたら、甘みが凝縮して、それをつまみにお酒が飲めるぐらいですよ。

**武中** そのお米、とりたい病院に持って来てもらえませんか? 地元の人たちに食べてもらいたい。

**川口** ぜひぜひ! 移住を検討したときに、まず考慮したのが信頼できる病院があるかどうか、でした。この地域で高度医療を実践している、とりたい病院は最後の砦。頼りにしています!

という指導が関係しているとはぼくは見えています。

**武中** ゴロを打てという指示ですか?

**川口** フライは野手がとればアウト。ゴロは、野手がとってファーストに投げなければならぬ。一つ「工程」が増える。

**武中** そこでミスが起こる可能性がある、と。これも相手のミスを期待するという、消極的な発想ですね。

**川口** いい打者はバットをしつかりとボールに当てて遠くに飛ばす。その練習をしなかったから、いい打者が生まれなかった。これからは変わるはずですよ。

**武中** 川口さんは広島から読売ジャイアンツに移り、現役引退。ジャイアンツでコーチとして多くの選手を指導しました。ぼくも教授として後進の教育をしてきましたが、人を育てる上で心がけていることはありますか?

**川口** ぼくは自分の考えの押し売りはしないです。プロの選手は特に調子のいいときはコーチの言うことは聞かない(笑)。上手いかななくて悩んでいる、苦しんでいるときは、スポンジのように吸収する状態になっている。選手にはそれぞれ個性があります。コーチはその選手に合った引き出しを持っていなければならない。あとはぼくは一緒にゴルフに行ったりして選手レベルまで降りることは意識していません。(ジャイアンツの投手だった)杉内俊哉君はゴルフが好きでした。彼がノーヒットノーランを達成したときは、「ノーヒット



武中篤 鳥取大学医学部附属病院長

1961年兵庫県出身。山口大学医学部卒業。神戸大学院研究科(外科系、泌尿器科学専攻)修了。医学博士。神戸大学医学部附属病院、川崎医科大学医学部、米田コーネル大学医学部客員教授などを経て、2010年鳥取大学医学部泌尿器科学分野教授。2017年副病院長。低侵襲外科センター長、新規医療推進センター長、広報・企画戦略センター長、がんセンター長などを歴任し、2023年から病院長に就任。とりたい病院が住民や職員にとって積極的に誰かに自慢したくなる病院「Our Hospital」私たちの病院」の実現に向けて取り組んでいる。

### 川口和久

元プロ野球選手投手。コーチ、野球解説者。テレビ朝日「元プロ野球選手投手」出演。鳥取県鳥取市出身。鳥取湖南小学校で野球を始め、鳥取城北高校に進学後、県大会決勝にチームを導く。ロッテ・オリオンズ(現千葉ロッテ・マリナーズ)にドラフト6位で指名されるが拒否。社会人野球チーム、デュープロに入団。1980年ドラフト1位で広島カープに指名され入団。87年、89年、91年には三振王に輝く。1994年FAを宣言し、巨人に入団。1998年に現役を引退。引退後は野球解説者の傍ら映画やテレビドラマに出演するなど、野球以外の分野でも活躍。コロナ禍における母の死をきっかけに、神奈川県から鳥取にUターンを決意。農業に従事する傍ら鳥取の野球振興に力を注いでいる。

# とりだい病院サポーター通信

(よみがな) ありた ちづこ

名前 有田 千寿子 出身地 静岡県磐田市

とりだい病院では「サポーター」制度として、様々な方がボランティア活動を行なっています。この連載ではこうしたサポーターの活躍を取り上げていきます。みなさんもとりだい病院を「私たちの病院」にしてみませんか？

写真 中村 治

### 活動内容

院内図書の整理と外来患者さんが自動精算機で困られた時のサポートや病棟入口受付の見守りなどを行っています。

### いつから

2023年の12月から

### きっかけ

とりだい病院で看護師として働いていました。在職中から退職後になにか関わることができたらいいなと思っていたとき、友人から「サポーターを募集していますよ」と教えていただきました。



### とりだい病院のここが好き！

職員が優しい。常に進化しているところなど、地域住民として頼りになります。

### やりがい

患者さんやご家族、職員さんとの会話やお手伝いを通して「笑顔や元気のキャッチボールができた」と感じる時です。

### さらにやってみたいこと

病院まわりの草取り。

### 趣味/特技

温泉旅行、読書、友人とのランチ

### 山陰でお薦めの場所

温泉と海水浴が同時に楽しめる皆生温泉。また尾高城址は梅の名所。梅園越しに見る大山もおすすめです。

## とりだい病院サポーター制度とは

とりだい病院がより良い病院「Our hospital (アワーホスピタル)～私たちの病院」に成長することを目指し、広く地域住民の方に病院運営に参加していただくとう導入した制度。ボランティア部門、イベント部門、病院モニター部門、広報活動支援部門の4部門で構成。また寄付によるサポート支援もいただいています。

### 【募集要件】

- 15歳以上の方 ※中学校卒業以上（未成年については保護者の同意が必要）
- 本制度の趣旨を理解し無報酬で活動していただける方
- 本院の規則を遵守し職員の指示に従って活動していただける方

### 【申込先】

鳥取大学医学部附属病院 医療支援課 患者サービス係

詳しくはこちら



カニジルご意見箱

通称

## カニジル



読者から

編集から

鳥取大学を卒業して30年ぶりに大学病院に立ち寄り、たまたまカニジルを手に入れました。母校の皆さんの充実ぶりと努力に感銘しました。東京でも「カニジル」が手に入ればいいんですけどね。(東京都・Uさん)

30年ぶりのこと。当時からは増改築も進み、景色も随分変わったのではないのでしょうか。懐かしさのなか、手にされたカニジルを通じて、今のとりだい病院を知ってもらえてとても嬉しいです。また、「東京でも手に入れば」とのご意見ありがとうございます。そんな声にお応えて、今回、鳥取県アンテナショップ「とっとり・おかやま新橋館」にご協力いただき、毎号置いてもらえることになりました！ ぜひ次号以降もカニジル応援よろしくお願いします(藤谷)。

カニジルサイト QRコード



### カニジルへのご意見・ご感想を募集中！



www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanijiru/e/

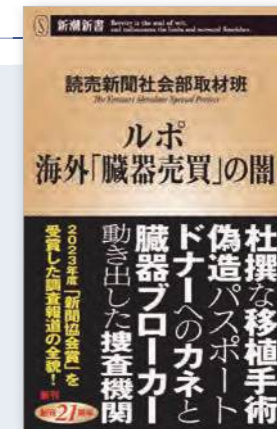
とりだい病院ホームページからもアクセスできます。トップ > 病院のご紹介 > 当院の広報物 > 読者アンケート回答フォーム

抽選でカニジルステッカープレゼント！



※ステッカーの種類は選べません。

# 医療従事者は「話題の本」をこう読む



## 第4回 『ルポ 海外「臓器売買」の闇』

(読売新聞社会部取材班 新潮新書)

評者

鳥取大学医学部附属病院 腎センター長 特命准教授 引田克弥

本書は読売新聞社会部取材班による臓器売買の実態とその闇を徹底的に調査したノンフィクション作品である。

本書に書かれているように、取材した記者たちは、もともと医療分野が専門ではない。国内外での臓器売買の闇を解き明かすために試行錯誤を繰り返して、取材報道を行なった記録でもある。

私が引きつけられたのは臓器売買の実際の現場の生々しい描写だった。経済格差や貧困に苦しむ人々が、生活のために自らの臓器を売らざるを得ない状況、ブローカーや臓器売買に関わる医療関係者の関与など、複雑な臓器売買のネットワークが浮き彫りにされている。ウクライナやベラルーシなどの国々で行われた臓器売買の詳細を明らかにし、その社会的、倫理的問題を提起している。

この本のテーマ、臓器移植について説明したい。

とりだい病院では2022年に「腎センター」を開設した。泌尿器科医である私は、現在センター長を務めている。臓器移植も我々の専門である。

2022年12月末で日本国内では約35万人が透析療法を受けている。国民の約360人に1人が透析患者という計算になる。末期腎不全になると生命の維持が困難になり、透析、あるいは移植などの「腎代替療法」が必要となる。透析には血液透析、腹膜透析があるが、いずれも患者の負担は大きい。現時点で根治治療は腎移植のみである。

腎移植には親族から提供を受ける生体腎移植、亡くなった方から提供いただく献腎移植がある。年間200例の献腎移

植が施行されているが、献腎移植を希望する患者は約1万4千人。しかし、日本移植学会によると2022年の腎移植数は1785例に過ぎない。献腎移植を希望し、臓器移植ネットワークに登録しても、14年程度待機する必要があるのだ。透析は生活の質が低下し、時間や食事、飲水など著しく制限を受けるため、健康人が考えているより負担がかかる。金銭で臓器を買う、という選択肢は本来あってはならないことであるが、その苦しみから抜け出したいという気持ちは理解できる。

臓器売買は以前から国際的な問題だった。約20年前、私は勤務していた病院で透析を担当していた。ある患者がフィリピンで腎移植を受けるため他院へ転院となったことがあった。当時の透析部長が法的、倫理的に問題があるからやめるよう強く説得していたことを覚えている。患者が希望に満ちて移植の話をしてきたことが強く印象に残っている。その患者のその後の経過はわからない。

2008年、トルコで行われた国際移植学会で「イスタンブール宣言」がとりまとめられた。宣言では、臓器売買・移植ツーリズムの禁止、自国での臓器移植の推進、生体ドナーの保護を提言している。

移植ツーリズムは、世界の「経済格差」と密接な関係がある。臓器を提供するドナーとなるのは、社会的弱者、貧者である。宣言には自国で提供者を増やす努力が必要であると明記され、国外での

合法的な移植の機会は減少している。しかし、本書の指摘するように密かに行われており、日本人もその中に含まれる。厚生労働省の調査によると、2023年3月31日時点で日本人の渡航移植患者数は543人。国外で移植を受けた外来通院者は198人。これらの患者が国外9カ国で腎移植を受けていたことになる。

ただし、この数字は限られた施設を対象とした調査であり、実際の渡航移植患者数はさらに多いものと推察されている。本来、臓器移植は多くの患者の生命を救う重要な医療行為である。しかし、臓器売買と不適切な医療行為に伴い、亡くなられた方、後遺症が残った方など、その過程で多くの人々が苦しんでいる。臓器売買を助けるためという大義名分を掲げながら、実際は本書に書かれているように金銭目当てであり、賛同すべき点はない。

医療従事者として、患者の命を救うための臓器移植が臓器売買によって不幸な転機をたどることはあってはならない。倫理的な行動をとることの重要性を再認識させられた一冊だった。

引田克弥(ひきた かつや)

1974年米子市生まれ。鳥取大学医学部医学科卒業後、とりだい病院、国立病院機構米子医療センター、東京女子医科大学泌尿器科などを経て、2022年からとりだい病院腎センター長、特命准教授に就任。専門は腎移植、前立腺がん、排尿障害。

# とりだいいフェス2024の大きな可能性

「ここ本場に病院なの」  
「普段はね、患者さんやお医者さんでいっぱいなんだよ」

特設ステージを見つめる親子の会話が聞こえる。子どもの素朴な疑問の声に目を細める武中篤とりだいい病院長。普段なら白衣の医師や看護師、スタッフ、そして、診察や会計を待つ患者さんらが静かに座る病院外来ロビー。この日は、子ども達の歓声や拍手であふれかえった。

とりだいい病院の患者さん、かつて通院された方もいた。病院に足を踏み入れたことのない人はもちろん、病院で働く医師や看護師、スタッフらも今日はお母さんやお父さん、友達同士の顔をしていた。

6月16日曜日、とりだいい病院では、日本初の試みとなる医療とエンタメを融合させた「とりだいいフェス2024」が初開催。その楽しい雰囲気は6ページからのフォトボルテージでも伝わるはず。

休日の病院を最新医療の体験や分かりやすく病院を知ってもらい、踊って笑う。そんな学びの遊び場として市民に開放。大勢の家族連れやカップルらが多彩な催しを楽しんだ。

そもそもフェスとは、アメリカで頻繁に開催され若者を中心に人気を博したロックやジャズの野外イベントの事。そのフェスティバルの略称がフェス、である。

音楽好きのカニジル編集長の田崎健太さんが音楽フェスをヒントに企画、共同プロデューサーに

とりだいい病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科分野教授の藤原和典さん。病院内から集まった有志の医師・看護師・スタッフらが手弁当で実施にこぎつけた。

もちろんその奥にいるのは、武中病院長だ。彼はオーブニングで「地域の皆さんにとりだいい病院をもっと知っていただき、病院のファンになっていただく。そんなきっかけになれば嬉しい」と挨拶した。「とりだいいサポーター」のボランティアの方たちもイベント運営に汗を流してくれた。

まずびつくりしたのは、手術室で行われた手術支援ロボットの見学ツアーの予約が30分で埋まってしまったこと。簡易バージョンにも長蛇の列ができた。実際に手術室の前でガウンに着替え、ロボットの体感や写真もとれるとあって大人気。

「最新の医療機器への関心がこんなに高いなんて驚いた」と藤原教授は目を丸くしていた。

その他、子ども達が白衣姿で医師になりきりエコーや内視鏡に触れることのできる「とりザニア」、電動車椅子の体験、皆生温泉から運ばれた足湯にマッサージ、美食キッチンカーと盛りだくさん。院内の名物本屋さん・カニジルブックストアも大賑わいだった。

なかでも人気だったのが、中庭で行われた漫才師「ダイノジ」のキッズディスコ。大谷ノブ彦さんがDJで盛り上げ、大地洋輔さんのエアギターが炸裂。子どもも大人も軽快なリズムに合わせてダンスを楽しんだ。

盛り上げてくれた大地さんは「病院でこんなイベントができるとは思わなかった。患者さんも病気が吹き飛ぶみたいと話してくれた。音楽や笑いの力を改めて感じました」と汗を光らせる。ダンスの真ん中には、満面の笑みで踊る、武中病院長の姿もあった。

外来ロビーのメインステージには、音楽芸人の「こまつ」と女性診療科の小松宏彰講師が兄弟登場。小松医師のすべり気味の司会とトランペットとキーボードを同時演奏する超絶プレー。輝きのある美しいメロディーが心を捉え、なかには涙を浮かべる観客もいた。医学部学生らによる室内交響楽やコーラスが外来ロビーの高い天井に響き、

欧州の聖堂で聞いているような趣だった。病院を知ってもらい、活用してもらおう。高度医療の砦、医学の最先端基地だからこそ、とりだいい病院は地域との密なつながりを大切にしなければならぬ。大きな可能性を秘めたこのフェスが、

4000人の市民もそう言っているように感じた。



結城豊弘

1962年鳥取県境港市生まれ。テレビプロデューサー。とりだいい病院特別顧問と本誌スーパーバイザーを務める。鳥取県アドバイザースタッフ。境港観光協会会長。

## Tottori Breath

# 鳥取大学医学科生II 医師のたまご とりだいま に訊け!

取材・文 井野寿音  
写真 中村治



最終回

医学科6年の紙浦愛佳が医師を志したのは、小学校4年生の時に読んだ「電池が切れるまで」という本がきっかけだった。同じ歳の女の子が小児がんで亡くなるという内容に衝撃を受けたのだ。そして最後の一押しとなったのは、高校時代に受けたイジメだった。

「あのとき自分の存在価値を見失いかけたんです。振り返ってみれば、思う存分勉強をさせてもらえるという自分の環境って恵まれているじゃないですか。その恩返しじゃないですが、社会に貢献したいと思ったんです」

智辯和歌山高校を卒業後、1年間の浪人を経て鳥取大学医学部医学科に入学。入学後は「医学生として、今できることをやろう」と国内外で課外活動を始めた。特に力を入れたのが、乳がんの正しい情報をわかりやすく発信するための乳腺科医の団体「BC Tube」でのインターンである。



医学部医学科6年 紙浦愛佳さん  
BC Tube HP <https://bctube.org/>

「特に地方だと、乳がんにかかったことを知られたくないので患者会にも行きづらいという人がいらっしやる。でも、患者同士で悩みを共有したいという気持ちはあるんです。乳房を失った喪失感を感じてしまわないように」

そこで匿名かつ画面オフのオンライン患者会を開催した。さらに、日本の乳がん検診受診率が低いことに着目し、検診受診率の国際比較と他国の取り組みについての疫学研究を行い、日本乳癌検診学会で発表、論文も執筆した。

紙浦が目指すのは臨床・社会・研究の3つの側面から女性医療にアプローチすること。その一つが未受診妊婦への対応である。

「出産前に産婦人科を受診しない妊婦さんたちがおられます。どうしても責任感がないなど悪く捉えられがちですが、そうではないんです。検診に行く必要があると知らなかった、育てる経済力がなかった、誰にも相談できなかったという背景を理解しなければなりません」

「女性は様々なライフイベントがある中でホルモンのバランスが変わっていく。自分のせいではないのに、バイオリズムに勝手に支配されて別人のようになってしまったり、些細なことでもどうしようもなく落ち込んで、なにもかも上手くいかない日がある。そんな忙しい女性の人生に寄り添いたい、どうにかしてあげたいと思ったんです」

日本中の女性の心身の健康を守るのが私の使命です、と目を輝かせて語る紙浦は、間違いなく次世代のリーダーである。

### 編集 井野寿音

読者の皆様、連載『とりだいまに訊け!』は楽しんでいただけていますでしょうか。カニジルの編集に参加してから3年が経ち、私も4年生になってしまいました。「とりだいま読んだよ!」と声をかけていただけること、取材で先輩方や先生方とお話できたこと、いい文章が思いつかず取材原稿とらめっこする時間、書き終えた原稿を「面白い!」と編集長にほめられた瞬間。全てが私にとって幸せな時間でした。読者の一人だった私がカニジル編集部の一員として連載を持たせてもらえるなんて、本当に有難いことで、全部夢だったんじゃないかと思ってしまうくらいです。皆様の応援とご縁に、心から感謝しております。

来年1月から、いよいよ大学病院での臨床実習が始まります。連載は今回で終了しますが、「student doctor」として病院のどこかでひっそりと生息しています…(笑)  
今号では、私が初めて担当した企画『ファッションチェック』第2弾があります。そちらもぜひご覧ください!

〈飛鳥の森とは〉  
鳥取大学医学部キャンパス内にある、学生や患者さんが集う憩いの場。「飛鳥(ひちょう)」という言葉には、鳥取大学の一層の飛躍を願う気持ちが込められている。

## カニジル編集部 飛鳥の森 HICHO no MORI



### 「カニジルラジオ」 (BSS山陰放送)

毎週土曜日 0時25分から放送中。  
病院関係者が出演、とりだいい病院をもっと知ることができる番組です。

過去の放送も  
こちらで聞けます。



# カニジルラジオ

放送 土曜 0:25-0:55